

平成 26 年 5 月 14 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531186

研究課題名(和文) フランスの初等教員の音楽能力の基準とIUFMにおける音楽教育の実態調査

研究課題名(英文) Study on the Actual Conditions for the Standard of Music Ability to Primary School Teacher in France and the Music Education in IUFM

研究代表者

吉澤 恭子 (YOSHIZAWA, Kyoko)

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：40594354

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、フランスの初等教員採用試験要項と初等教員採用試験年度報告書を対象として将来の初等教員に求められる音楽能力の基準について考察すること、そしてIUFMにおける音楽教育の実態調査を行うことである。

初等教員採用試験では、受験者の授業観に基づいた音楽技能(演奏表現力、聴取力)と知識・教養が評価される。パリ・アカデミーに所属するIUFMの音楽教育プログラムの特徴として、初等学校の協力によるAPP(教職実践演習)の運営方法、児童・生徒を対象とした公的事業の活用、教員採用試験対策の充実が挙げられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to discuss about the standard of music ability demanded for a future primary school teacher in France according to the employment examination guideline for primary school teacher and the annual report of the employment examination and Music Education in IUFM.

In the primary school teacher employment examination, a music skill such as performance ability, listening ability based on the view of examinee, and knowledge and culture are evaluated. In the music education program of IUFM belonging to the Paris Academy, utilization of the administration method of APP (Atelier de Pratique Professionnelle) by collaboration with primary schools and the public activity for pupil, and improving of teacher employment examination are characterized.

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教科教育

キーワード：フランス IUFM 教員養成 初等教員 音楽能力 教員採用試験

1. 研究開始当初の背景

日本の教員養成大学における小学校課程では、全教科を教えることができる教員を育成することを前提とし、カリキュラムが構成されている。しかし小学校教員免許取得に必修の「音楽科」に関する科目には、教員になるために必要な音楽能力の基準が明確にされておらず、さらに教員養成としての授業方針・内容と教員採用試験との関連性も不明瞭である。一方フランスの場合、初等教員採用試験 (Concours de Recrutement de Professeurs des Ecoles, concours externe, 以下 CRPE) は国家試験であり、全国統一の試験要項が存在する。CRPE において「音楽」は児童文学、視覚芸術と共に、第 2 次試験 (Epreuve d'admission) の選択科目に位置づけられ、将来初等教員をめざす受験者に期待される音楽能力の基準が明示されていると考えられる。

フランスを代表する初等・中等教員養成機関は IUFM (Institut Universitaire de Formation des Maîtres, 教員養成大学センター) である。IUFM には学士号取得後に入学するため、日本では教職大学院とみなされている。IUFM と大学との統合化以前の IUFM 初等教員養成課程 1 年目 (PE1) では、初期教育と共に CRPE 受験対策を含む授業・演習が教育プログラムに組み込まれていることが分かった。また「音楽能力」に関して、CRPE の過去問題の概観から演奏表現のみならず音楽教養、聴取力や音楽分析力の有無が教員採用試験の可否のポイントになることが明らかになってきた。そこで本研究では、将来初等教員をめざす受験者の音楽能力の基準を窺い知れる CRPE の音楽試験の内容と実状を把握すること、そして教員養成、音楽科教育、教員採用試験との関連性をめぐり、フランスの初等教員養成課程における音楽教育の実態調査を IUFM において実施することにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、フランスの初等教員に求められる音楽能力の基準に関する考察およびパリ・アカデミーの IUFM における音楽教育の実態調査を実施することである。

(1) フランスの初等教員の音楽能力の基準を窺い知れる資料研究として、主に以下 3 つの観点から考察する。

・初等教員採用試験における「音楽」は、第 2 次試験の選択科目である。このことから、フランス全体における受験者の選択状況について概観する。

・初等教員採用試験要項の考察から、音楽科目の試験課題の内容や審査方針等について明らかにする。

・初等教員採用試験の第 2 次試験で「音楽」を選択した受験者の状況等を概観し、どのような資質・能力が将来初等教員をめざす者に必要とされているのかについて把握する。

(2) パリ・アカデミーの IUFM における音楽教育の実態調査に関して、修士課程 (初等教員養成コース) における教育プログラムの全体像を把握し、教育内容・運営方針等の特徴を明らかにする。

3. 研究の方法

上記の課題に対応した研究の方法は、次の通りである。

(1) 初等教員採用試験「音楽」をめぐる受験者の様相

毎年、フランスのアカデミー (大学区) の多くが「初等教員採用試験報告書」(Rapports de jurys, 以下『報告書』) をインターネット上で公開している。それらの情報を基に、CRPE の第 2 次試験で「音楽」を選択した受験者の統計データならびに審査官の評価の観点や講評等の記述内容を整理し、考察する。『報告書』は、2005 年改訂「初等教員採用試験要項」が施行された 2005/2006 年度以降の『報告書』を対象とする。

(2) 初等教員採用試験「音楽」の運営・審査方法

音楽試験は、前半「演奏試験」と後半「音楽聴取審査・面接」で構成される。先の『報告書』に見られる記述内容も検討しつつ、実際に試験の運営や審査に携わった関係者とのインタビューを実施する。

(3) 初等教員に期待される音楽能力 (演奏表現力および聴取力) に関する考察

初等教員採用試験における音楽試験の前半では「実技 (演奏) 審査」、後半の「面接」では「音楽聴取審査」が行われる。受験者のそうした能力の実態を窺い知れる『報告書』の記述内容を整理する。特に後半の音楽聴取力については、日本の小学校学習指導要領に相当する『初等学校プログラム』および初等教員採用試験を合格に導くためのガイドブックの内容も考察の対象とする。

(4) パリ・アカデミーの IUFM 修士課程 (初等教員養成コース)「教育プログラム」の全体像と「音楽教育」に関する授業内容・運営について

パリ・アカデミーの IUFM のホームページから、「教育プログラム」に関する基本情報が得られる。その内容を整理した上で、「音楽教育」に関する授業・演習および教育実習等の視察調査を行う。実地調査では、教育スタッフとのインタビューおよび受講生へのアンケート等も実施する。

4. 研究成果

(1) 初等教員採用試験に関する考察

「音楽」選択受験者に関する統計分析結果
2005 年改訂「初等教員採用試験要項」が適用された年度から現行の新体制に移行するまでの期間、すなわち 2005/2006 年度から

2009/2010年度までに実施されたCRPEの『報告書』をもとに「音楽」の選択状況を分析した。その結果、ウェブサイト上の『報告書』公表率はアカデミーによって不均等である上に、データの作成方法や開示内容（科目別受験者数・選択率・合格率、平均点、試験結果講評等）が統一されていない点が目立った。フランス国内26アカデミーのうち、「音楽」に関するデータが確認できたのは12アカデミー（ブザンソン、カン、クレルモン＝フェラン、コルス、クレティユ、グルノーブル、リモージュ、ナント、パリ、レンヌ、ストラスプール、トゥルーズ）、そのうち選択科目（視覚芸術、音楽、児童文学）別データを公表しているのは9アカデミー（クレルモン＝フェラン、グルノーブル、リモージュ、ナント、パリ、レンヌ、ランス、ストラスプール、トゥルーズ）であった。アカデミーおよび年度別データ分析を行った結果、「児童文学」（約46～75%）の選択率が最も高く、「音楽」（約12～29%）「視覚芸術」（約11～25%）と確認された。「児童文学」以外の2科目はアカデミーや年度によって順位が逆転するが、中でもレンヌ・アカデミーでは「児童文学」の次に「音楽」の選択率が高く、他のアカデミーと比べて「視覚芸術」との選択率に差が生じていることが分かった。全体的に「音楽」受験者の占める割合は全体の約1割から3割弱と低く、また唯一2005/2006年度から2007/2008年度まで科目別最終合格率データを公開するレンヌ・アカデミーの結果を加味すれば、「音楽」を選択し、初等教員になる確率は全体の約22～24%であることから、フランスの初等学校では音楽技能・教養を有する初等教員が不足している実態が理解される一つの結果が得られた。

実技（演奏）審査

「初等教員採用試験要項」が2009年に改訂され、2010/2011年度から新体制による初等教員採用試験（CRPE）が実施されている。「音楽」は、第2次試験「口述試験」に設定される選択科目である。CRPE全体における「音楽」の位置づけおよび試験内容に関して、2005年改訂「初等教員採用試験要項」の記述と変更はないが、新要項では試験時間が25分（技能試験10分、面接15分）から20分（技能試験10分、面接10分）に短縮された。近年の『報告書』によると、音楽技能試験では声楽受験者が多い現実に即して「きちんとした音程で歌えること」が初等教員に求められる基礎的能力の一つとして理解された。一方、技能試験では歌と楽器の実践力が同時に評価される「弾き歌い」が推奨されている事実から、こうした教員の能力が現場の実践に必要とされていることも推察された。しかし、受験者に期待される能力はそれだけではない。初等教員採用試験実施の理念は「音楽の授業ができるかどうか」を審査することであり、技能試験の審査方針は「実践場面」と

いう現実と切り離して歌や楽器の演奏表現力そのものを評価することにはない。多様な音楽実践を伴う教科の特性から、児童の前で歌ったり、楽器を演奏し生の音楽を聴かせ、同時に自らの音楽表現を提示できる力、児童の表現力や音楽性を理解・認識できる力、そして児童と音楽実践を共にし、そうした状況をクラスで創り上げていくことができる力があるかどうかという実践指導面に加え、音楽をとおして児童に何を教え、伝えたいのかという受験者の教材観をも交えた知識・教養の有無を審査する手段として、演奏試験とブレゼンテーションが課されている。

制度上、フランスの小学校教育には日本の検定教科書に相当する音楽教科書、それと併用される教師用指導書や視聴覚教材は存在しない。フランス国民教育省が定める『初等教育プログラム』には、歌唱共通教材に相当するレパートリーの設定もない。「音楽」の授業は『初等教育プログラム』の内容・方針に沿うことを条件とし、教員の自由裁量で行うことができるが現実には、市販の教材や指導書を用いながら授業の題材を探し、選択し、授業計画を立て、それを実施するために必要な音楽技能・教養そして指導力を併せもつ者でなければ務まらない。従ってCRPEで「音楽」を選択する受験者は、技能試験のための演奏作品を選曲する段階で自らの演奏技能・表現力と教材観の適合性をふまえ、一連の授業プランを立てる課題に直面する。そうしたプロセスの中で教育現場を想定し、現場の実践と向き合っていける教師力の基礎、中でもどのように授業を組み立て、音楽実践を導いていくかという思考力が教員採用試験準備期間に培われていくのだろう。フランスの初等教員採用試験「音楽」は「口述試験」のカテゴリーに属し、単なる知識や教養を問う絶対評価付けが容易な筆記試験は課されない。演奏試験では、使用楽器の制限も課題曲の設定もない。この自由さと柔軟さに、受験者の多くの可能性と将来性（教員としての能力・資質・適性等）を評価しようとしている審査方針が窺えた。

音楽聴取審査

前半の実技（演奏）試験に続き、後半の「面接」では受験者の音楽に関する知識・教養、そしてそれらを初等教育の実践にどのように結びつけることができるかという観点から、教員としての能力・資質が審査の対象となるが、面接開始時に試験官は受験者が実技試験で演奏した曲と異なるジャンルの「音源資料」（un document sonore）を一つ選び、聴かせることで受験者の音楽聴取力を審査する。2005/2006年度からの新初等教員採用試験制度の施行を機に、音楽聴取審査のためのBanque nationale de documents sonores 2006（以下『音源資料データ集』）が、2006年にパリ・アカデミー視学官V.マエストラッチ氏の権限下、アカデミー視学官、現職教員

や教育顧問を含む有識者グループによって編纂された。『音源資料データ集』は全国共通のレベル基準を示す模範的音源選集である。試験官が聴取審査時に活用できるように全アカデミーに配布され、2005/2006年度以降の面接試験で使用されている。

リモージュ・アカデミー(2007/2008年度～2008/2009年度)は受験者が演奏した曲名と演奏形態、音楽聴取曲名リスト、そしてクレルモン＝フェラン・アカデミー(2010/2011年度～2012/2013年度)は音楽聴取審査で使用された曲名リストを『報告書』で公表している。このことから、CRPEに挑んだ受験者の音楽技能試験の諸相(演奏曲、聴取曲を総合的に見た音楽ジャンル・時代等の傾向と多様性)が確認できた。

CRPEの音楽試験の考察に先立ち、研究代表者は2005年改訂「初等教員採用試験要項」以降の初等教員採用試験「音楽・口述試験」対策として刊行されたIUFM初等教員養成課程1年生のための『手引書』(*Concours externe de professeur des écoles PE1 Musique - Epreuve orale d'entretien*, Bordas, 2007)を読み解くことにより、音楽聴取力を身につけるための手段として音楽を聴く際の目印と習得すべき専門用語について整理している。この内容とも関連するが、音楽聴取審査を初等教員採用試験の面接時で導入する理由には、受験者の聴覚による音楽教養の有無や音楽分析力だけではなく、オラルで説明する力と音楽語彙の習熟度を審査する目的もある。さらに『報告書』に見られる講評の考察から、受験者に期待される音楽の聴き「型」と音楽を聴く際の視点となる「音楽の諸要素」を示す具体的な内容が明らかになった。

近年の『報告書』では、2008年9月からフランスの小学校教育に導入された「芸術史教育」との関連性についても言及されている。芸術史教育には「音楽史」の学習も含まれ、初等教員採用試験で「音楽」を選択受験する者は「音楽史」に関する基礎知識を習得する必要があると指摘されている。「芸術史教育」の学習内容を理解し、それを小学校の音楽実践に反映させていく力は、演奏力、聴取力と共に、現在のフランスの初等教員に求められる資質・能力の一つであることが理解された。

(2) IUFMにおける音楽教育の実態調査

パリ・アカデミーのIUFM(Molitor校およびBatignolles校)において、初等教員養成コースの「音楽教育」のみならず、中等教員養成コースの「音楽教育」に関する講義・演習、音楽課外活動ならびに現職教育を視察し、それらの実態調査を行った。なお、教育実習に関しては視察許可が得られなかった。

パリ・アカデミーにおけるIUFMと大学との統合化以降、修士課程に教員養成が組み入れられたことによる教育改革は本研究期間中も継続され、毎年IUFMの教育プログラム

が微調整された。さらに本研究期間最終年度の2013年9月から、IUFMの名称がESPE(Ecole Supérieure du Professorat et de l'Education)に変わった。

フランスの初等教員の音楽能力・資質育成に関する研究成果として、パリ・アカデミーのIUFMにおける初等教員養成の運営方法や音楽教育に関する特徴を、以下4点に整理する。

修士課程(初等教員養成コース)の教育プログラムの全体像

パリ・アカデミーのIUFMは2008年1月に5つのパリ大学(第1、第3、第4、第6、第7)と統合し、初等教員に修士号の取得が義務づけられたことから教育課程も大幅に改編された。従来の初等教員養成課程を示すPE1(Professeur d'école en 1ère année)とPE2(Professeur d'école en 2ème année)の名称が、2010/2011年度からMaster 1 de 1er degré(修士課程1年)Master 2 de 1er degré(修士課程2年)に変更された。

IUFM修士課程(初等教員養成コース)1年生(2011/2012～2013/2014年度)の教育プログラムは、講義・演習、実地研修(APP、教育実習)、修士論文作成のための研究の手ほどきと修士論文の作成、初等教員採用試験受験対策で構成される。教育実習を除く授業構成区分はUE1、UE2、UE3、UE4、UE5、UE6であり、講義・演習(共通基礎科目、教員試験対策、APP、自由選択科目等)がUE1からUE4、修士論文作成と研究の手ほどきと直結する専門選択5コース(1コースを選択)がUE5とUE6に相当する。なお専門選択5コースは、2012/2013年度から16コースに拡大された。修士論文は、修士課程1年目で作成し、論文口述審査は5月に行われる。また初等教員採用試験は、修士号取得に要する2年の修学期間に合わせて2年かけて実施されるようになった。修士課程1年目で受ける第1次試験「筆記試験」の合格者は、修士課程2年目に第2次試験「口述試験」を受ける。第2次試験の選択科目「音楽」のための試験準備対策(講義・演習、演奏リハーサル、面接練習等)は、修士課程2年目に設けられる。

APP(教職実践演習)について

2011/2012年度のデータによると、パリ・アカデミーのIUFM修士課程(初等教員養成コース)では、2年間を通じて1回2週間の教育実習が5回、計10週間の教育実習が教育プログラムに組み込まれている。修士課程1年目の1・2回目は観察を中心とした実習、修士課程2年目前半の3回目の実習で児童の指導に携わり、続く4・5回目の実習でクラス担任を経験するといった段階的な教育実習が行われる。教育プログラム上、APP(Atelier de Pratique Professionnelle, 教職実践演習)は修士課程1年目の教育実習の前後および2年目の前期(4・5回目の教育実習の前)に導入され、運営はIUFMと協

力校（幼稚園・小学校）の連携による。APPは約10名程度の学生によるグループ演習であり、週1回3時間の演習が5週連続して行われる。音楽教育に関するAPPの場合、IUFMの音楽教員および協力校の受け入れクラス担任のサポートの下、受講生は児童を前に短時間の個別あるいはグループによる「模擬授業」を行ったり、児童と共に音楽実践を共有する経験を得る。特に模擬授業の経験は、学生にとって「教育実習」によりよく臨むことができるための事前・事後実践演習として機能しているのではないかと感じられた。

言語を活用した音楽実践の多様性

フランスの『初等教育プログラム』においても、言語学習を重視する点は日本と共通している。現在日本の小学校音楽科で要請されている言語活動の充実化と関連し、IUFM修士課程（初等教員養成コース）の学生が必修履修する音楽教育の講義・演習では、言語（フランス語）を活用した様々な音楽実践が提示された。中でも「声と聴取」に言語活動を融合させた「音のボール」(Ballon sonore)の実践、フランス語のテキストを使用し音や音楽の諸要素（強さ、高さ、テンポ、ニュアンス、リズム、フレーズ等）の概念理解と関連づけて朗読させる実践、フランス語のテキストを音の重なりや音声・音質の違いを識別させ聴取力の育成と関連づけて朗読させる実践等のアプローチから、日本語を使用した際の音楽実践の方向性を探る上で大いに示唆が得られた。

文化芸術施設・団体との連携による音楽教育

パリ・アカデミーのIUFMが運営する初等教員養成としての音楽教育の在り方に、「芸術文化教育」と「芸術史教育」を重要視する方針が見られる。その具体的な取り組みは、公的音楽事業「Jeune public」（若い聴衆）の活用である。「Jeune public」とは学校教育を対象とし、実演による音楽コンサートや総合舞台芸術を低価格で鑑賞させる音楽事業である。パリ・アカデミーのIUFMは国立パリ・オペラ座およびシテ・ドゥ・ラ・ムジーク / サル・プレイエルと協定を結び、そうした文化芸術施設・団体の音楽事業「Jeune public」を将来学校教育に活用することができる初等教員を育成する目的で、修士論文の作成と研究テーマに関連した専門選択科目UE5/UE6「青少年のための文化・芸術・文学のメディアーション」（2011/2012年度入学者）もしくはUE5/UE6「音楽とJeune public」（2012/2013年度入学者）の履修学生に、「Jeune public」の演目を無料で参加・体験させる機会を与えている。社会における文化芸術の普及・発展へと繋がる可能性をもつこうした教員養成の取り組みを視察・調査する機会が得られたことによって、教員養成・学校教育・文化芸術政策をめぐる研究の視点が

拡大するとともに、これからの日本の初等教員養成と音楽教育の在り方を考えていく上で大いに示唆を得ることができた。

本研究の成果のうち、平成25年度までに発表できなかった成果の一部は平成26年10月25日・26日に聖心女子大学で開催される日本音楽教育学会第45回大会にて口頭発表するほか、平成26年度中に論文を投稿・刊行予定の学術雑誌論文において、引き続き発表する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

吉澤恭子「フランスの初等教員採用試験における音楽聴取審査の実状-音源資料と『報告書』に見るアカデミーの方針について-」愛知教育大学研究報告（芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編）第63輯（2014）愛知教育大学（査読有）pp. 7-15.
<http://hdl.handle.net/10424/5437>

吉澤恭子「フランスの初等教員採用試験における音楽技能試験の実状-『報告書』にみる評価の観点と期待される能力を中心に-」愛知教育大学研究報告（芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編）第62輯（2013）愛知教育大学（査読有）pp. 11-18.
<http://hdl.handle.net/10424/5007>

吉澤恭子「フランスの初等教員採用試験における「音楽」の選択状況-近年の報告書をもとに-」『日仏教育学会年報』日仏教育学会（査読無）18（2012）pp. 149-152.

吉澤恭子「フランスの初等教員に求められる音楽聴取力の基準-教員採用試験のための手引書（2007）を手がかりに-」愛知教育大学研究報告（芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編）第61輯（2012）愛知教育大学（査読有）pp. 1-10.
<http://hdl.handle.net/10424/4431>

〔学会発表〕(計5件)

吉澤恭子「フランスにおける初等教員養成としての音楽教育-文化政策と学校教育の融合をめざしたJeune publicの活用と実際-」日仏教育学会2013年度研究大会、2013年11月24日、西九州大学神園キャンパス

吉澤恭子「フランスの初等教員採用試験における音楽技能試験の実状-『報告書』にみる評価の観点と期待される能力を中心に-」日本音楽教育学会第44回大会、2013年10月13日、弘前大学

吉澤恭子「パリ・アカデミーのIUFMにおける音楽教育の取り組み-文化芸術施設・団体との協定を中心に-」日仏教育学会2012年度研究大会、2012年11月24日、早稲田大学

吉澤恭子「フランスのIUFMにおける音楽

教育-初等教員養成のためのカリキュラム
と教職実践演習（APP）について-」日本音
楽教育学会第43回大会、2012年10月7日、
東京音楽大学

吉澤恭子「フランスの初等教員採用試験
における「音楽」の位置づけと選択状況-
近年の報告書を基に-、日仏教育学会 2011
年度研究大会、2011年11月13日、関西大
学千里山キャンパス

〔図書〕(計1件)

吉澤恭子「第7章 比較教育学の視点を
交えて構想する小学校音楽科教科学」『教科
学を創る』第1集、愛知教育大学出版会、2013、
pp.95-112.

〔その他〕

特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉澤 恭子 (YOSHIZAWA, Kyoko)
愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：40594354

(2) 研究協力者

GIROUX, François
GLODEK, Anita
FAUCHER, Benoît
RAULE-GREGORIO, Cyrille